



## 『大使が語るリトアニア』

オーレリウス・ジーカス 著

星海社（星海社新書）

2024/09 224p 1,430 円（税込）

1. リトアニアの象徴とアイデンティティ
2. リトアニアの宗教と年中行事
3. リトアニアの自然
4. 歴史、観光、日本とリトアニアの絆
5. リトアニアの食文化
6. リトアニアの伝統文化と芸術
7. 現在のリトアニア

### 【イントロダクション】

「リトアニア」と聞いて何を連想するだろうか。日本では、バルト三国の一国であり、杉原千畝が同国の日本領事館で「命のビザ」を発給していたことなどが知られるが、その自然や歴史、文化などについて詳しい人は少ないだろう。いまだ「旧ソ連」のイメージを持つ人も少なくないが、実際はどのようなのだろうか。本書は、駐日リトアニア大使である著者が、日本人に向けて日本語で、リトアニアの歴史、アイデンティティ、宗教や行事といった文化、自然、さらに現在の様子などを紹介する。リトアニア人は穏やかである一方、ソ連時代に独立を宣言した最初の国となるなど勇気のある人々だと述べる。またリトアニアは食料自給率が高いほか、ICT（情報通信技術）やフィンテックに強く、2018年には国内に欧州初のブロックチェーン・センターが設立されるなど日本より進んでいる面もあるようだ。著者は駐日リトアニア大使。1978年リトアニア・カウナス生まれ。2008年ヴィータウタス・マグナス大学アジア研究センター長。11年同大学政治学部博士、15年同大学文学部文化研究科准教授。22年から現職。金沢大学、早稲田大学への留学経験があり、リトアニアにおける日本語学の第一人者として知られる。

### ●バルト三国の人々は「バルト三国」という言い方が好きではない

「リトアニアはどこですか?」。日本人に初めて会うたびにこの質問をされます。地理的な位置を説明すると、多くの場合「ああ、分かりました、バルト三国ですね」と反応されます。バルト三国は、リトアニア・ラトビア・エストニアの三つの国の総称ですね。

実は、「バルトの国」という言い方ができたのは、20世紀の初めです。当時、ロシア帝国から独立した（フィンランドを含めて）四か国を指す言葉でした。その後、第二次世界大戦後に再びソ連に占領された三つの国のサイズと経済力が似ていたため、ロシア語で「バルト海周辺（露語：Pribaltyka）」という概念が生まれました。

本音の話をしていいでしょうか。バルト三国の人々は、「バルト三国」という言い方はあまり好きではありません。それぞれの国が違う言葉（\*それぞれリトアニア語、ラトビア語、エストニア語）、歴史、宗教を持っています。話し合うときはお互いに外国語である英語で話すしかありません。それぞれの国に独自の文化やアイデンティティがあるので、ちょっとでも区別していただくと嬉しいです。

また、現地の人たちにとって「バルト三国」と言えば、「旧ソ連」という意味合いも感じられます。確かに50年間、バルト三国を含めて15か国が「ソ連」という刑務所に

入っていましたが、それはすでに 30 年以上前の過去となっています。

歴史が進むにつれて、暗い過去の記憶はなくなります。ソ連から独立したバルト三国も、北欧の民主化や福祉などのパターンを見習い、徐々に北欧に近づいてきました。宗教の面言えば、カトリック国のネットワークに参加し、価値や文化を分かち合っています。リトアニア人は、その面で「西欧の文明」の一員であることを誇り高く思っています。

リトアニアはとても穏やかな環境に恵まれています。この大人しい環境に似て、リトアニア人も建築、日常生活のものに穏やかな色、形を使っています。それは時々、素朴に近いです。このような考え方はリトアニアに限らず、広く北欧の文化とつながっています。

例えば、「Lagom (ラーゴム)」というスウェーデン語が表す概念はそれに近いです。これは「ちょうどいい」という意味の言葉で、多すぎずお洒落すぎずという考え方です。北欧のデザイン、インテリア、生活様式もこのアイデアに基づいています。いっぱいお金を使って、キラキラで豪華なものを作って見せつけるのは、北欧の文化ではありません。

時間の感覚も同じです。ゆっくり日々を過ごして、ありのままの瞬間を楽しんで、どこも急がないのが普通です。リトアニア人の観点からみると、日本人は、本当に働きすぎだと思います。リトアニア人も怠け者ではなく、昔から働き者として知られていますが、仕事は仕事で、休みも大事にしなければいけません。

## ● 「勇気」を出してソ連からの独立を宣言した最初の国

自慢話をさせてください。リトアニア人は、勇気のある民族です。日本の元寇と同時期、リトアニアにもモンゴル帝国が攻めてきましたが、リトアニアの東側で戦ってモンゴルの欧州侵入を止めました。その結果として、欧州最大の国、リトアニア大公国が成立しました。中世の栄光はリトアニア人のプライドの源で、苦しい占領下の時にもこのプライドから勇気がいつも湧いていました。

勇気があったからこそ、ソ連時代にはリトアニアのレジスタンスがとても強かったです。第二次世界大戦直後、若い男性が家を出て森の中に住みついて、ソ連の政府に対してゲリラ戦を続けていました。いわゆる「森の兄弟」です。10年でほとんどが殺されてしまいましたが、民族の勇気は絶えませんでした。アンダーグラウンドで政府に禁じられた雑誌が出版され、禁じられたお祭りがこっそり行われ、リトアニア人のアイデンティティや歴史の記憶が保護されました。

また、1988年に始まった独立運動の最中にも、勇気を出して1990年にソ連からの独立を宣言した最初の国はリトアニアでした。「早すぎない？ 馬鹿勇気じゃない？」とよく言われました。

「血の日曜日」を聞いたことがありますか。1991年1月に、いち早く独立を宣言したリトアニアを取り戻そうとしたソ連は軍隊を移動させ、総合出版社、国会議事堂、テレビ塔など、首都の戦略的な建物に戦車を送りました。それを分かっていた国民は、武器がなくても、自分の体で独立を守ろうという気持ちで、夜も昼も歌いながら手をつないで待っていました。

結局、1月13日の夜、戦車に多くの人たちがひかれて亡くなる事件が起こります。それが「血の日曜日」です。このときも人々は逃げませんでした。その夜、私の母もテレビ塔の前で、体で独立を守っていました。

## ● 欧州初のブロックチェーン・センターが設立されたフィンテック中心地

現在のリトアニアは、農業をナチュラルな方向に発展させています。無農薬、エコ、GM (遺伝子組み換え作物) フリーというのは、リトアニアの農業の大事なキーワード

です。広い畑で無農薬栽培がどんどんと流行っています。食料自給率は100%を超えて、場合によっては数百%になります。例えば、麦は自給率400%で、小国にもかかわらず穀物生産量はEUで5位です。

一つ、ソ連に感謝しなければいけないこともあります。それは理科学です。ソ連の高等教育では文系と社会学がマルクス・レーニン主義に基づいていたので、その分野では50年が失われました。が、理科学にソ連は本当に力を入れていました。それで優れた研究者が育てられました。彼らのおかげで、独立以来リトアニアのハイテクが急速に進んでいます。

その一例がレーザーです。1960年代に、ヴィリニウス大学物理学学部の学生たちはモスクワで学んだ後、リトアニアでレーザーの研究を始めました。ソ連が潰れる直前の1987年に、この研究所で初めて産業レーザー PL-1020 を作りました。世界で商品化されたレーザーの中で、先頭を走っていたのはリトアニアのレーザーでした。リトアニアの日本への最初の輸出品は、科学レーザーでした。今でも、リトアニアから日本への輸出の3割ぐらいはレーザーですよ。

この数十年、ICT（情報通信技術）も素早く進んできました。リトアニアに住んでから日本に来ると、時代が遅れているということも感じますよ。それは特にデジタル化のことで。リトアニアでは、ほとんどのことはスマホかパソコンで完結できます。最近、現金を触ったこともあまり覚えていません。公務の手続きも、税金も、結婚届も全部オンラインです。図書館もデジタル化が進んで、リトアニアの博物館のデジタル化は、まさかの100%です！

もう一つ、リトアニアが強い分野がフィンテックです。これはキャッシュレスだけではなく、本当に銀行のない世界に社会を変えていきます。2017年ごろ、リトアニアはフィンテックの中心地になるために電子マネーにとっても優しい環境を作って、海外から多くの直接投資（\* FDI）を誘致しました。それで多くの会社がリトアニアに入って、2018年に欧州初のブロックチェーン・センターがヴィリニウスに設立されました。翌年にヴィリニウスはフィンテックにおけるFDIで世界7位になりました。海外の投資がリトアニアで活かされ、また多くのイギリス、ドイツ、アメリカの企業は、ICTのことをリトアニアに任せています。

もちろんデジタル化の可能性だけではなく、その危険性も把握しなければいけません。リトアニアはサイバーセキュリティにも力を入れていきます。特に、隣にあるいくつかの国がサイバー攻撃が大好きなので、それを防ぐために研究も技術も早く進んでいます。いうまでもなく、日本の隣にもいくつかの国があるので、同じような攻撃を体験していますね。この分野で、両国がさまざまな共通点を分かち合って、お互いに協力できれば嬉しいです。

※「\*」がついた注および補足はダイジェスト作成者によるもの

**コメント：**リトアニアは、国土面積約6.5万平方キロメートルと日本の約6分の1、人口約282万人と日本の4分の1以下である。小さな国だが、歴史的にさまざまな人々が一緒に暮らしてきており、言語教育に力を入れるなどマイノリティと共存する伝統があるという。近年の人口構成においてはポーランド人6.5%、ロシア人5.0%、ベラルーシ人1.0%のほか、ウクライナからの難民も増えており0.6%に達している。流入した優秀なベラルーシ人やウクライナ人は、新しい企業を次々と設立し、リトアニア経済やデジタル化に貢献しているという。マイノリティの力を活かす伝統や政策には、日本も学ぶところが多いのではないだろうか。